

家庭学習の質的低下

—「ごまかし勉強」の増加とその原因—

藤澤 伸介

1. 問題の所在

今日は、家庭学習の質的低下の現状と、それを支える社会のシステムについてお話しさせていただきます。なぜ家庭学習に注目するかということから話題にしたいと思います。

基本的な私の考え方としましては、学校教育の目的ですが、社会人になってから自立的に学習していけるように、組織的総合的体系的に教育をするのが学校の役割の重要な部分であるという認識でおります。従いまして、教育は、学習者をどんどん立ち立たせていくようなものでなければならないと考えています。小学校低学年のうちは、教師が子供の学習に完全に介入して、学習活動のほとんどの部分が授業によって占められていても仕方がないと思いますが、だんだん小学校高学年、中学生となるにつれて、自発的な家庭学習をするようにもって行って、そして最後は一人で学習できるようにすべきだろうということです(図1)。

教師が生徒に出す宿題は、授業と自発的な家庭学習の中継ぎをするものです。学習者に向かって、突然一人で学習をやりなさいと言っても無理ですから、課題を出して教師なしで習得や探究ができるようにしてい

るわけです。ですから、教育がうまくいっているかどうかは、家庭学習の時間に義務的な課題だけでなく自発的な学習が活発に行われているかどうかにも、現れてくるのではないのでしょうか。

こういう前提に立って考えましたときに、中学生、高校生は家庭でどのような学習をしているかということが、教育の成果を考える時に非常に重要な問題だと思います。

2. 家庭学習の変化

最近、学力低下のことが盛んに取りざたされております。学力低下が起こっているかどうかについては議論があるようですが、子供たちの家庭での学習時間が減っていることから考えても、これは定着活動の時間が減ることを意味しますから、学力は低下して当然という気がいたします。

しかし、学習時間にさえ着目すれば良いとは思いません。教育関係者の議論を聞いていますと、家庭学習について頭のなかに描いているイメージが、語る人の年代によってあまりにも違いすぎ、その食い違いの結果議論がかみ合わないということが、しばしば生じています。私は、1970年代までの中学生と90年代の中

■なぜ家庭学習に注目するか

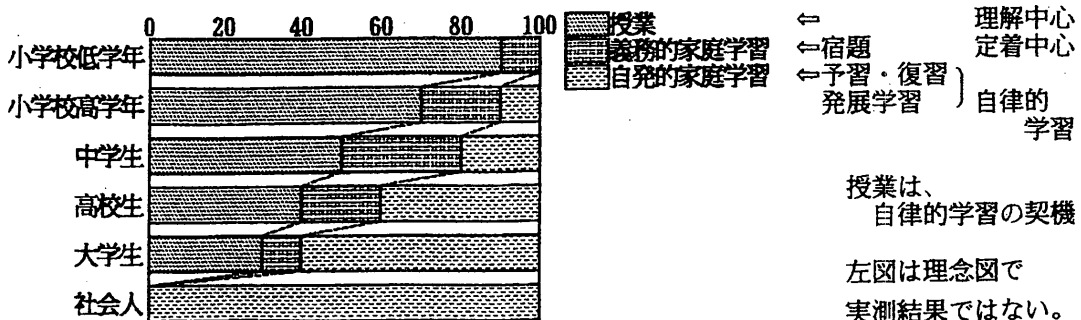


図1

学生では、家庭学習の内容が明らかに違っているという仮説を持っています。学力低下に関する議論がなかなか生産的にならないのは、その食い違いを明らかにしないままに、議論が進んでいるためと思われます。そこで本日は、まず中学生の学びの変化について指摘することから始めたいと思います。

(1) 70年代までの中学生

まず、70年代までの中学生においては、学習の主体が明らかに学習者本人にありました。ここでいう学習の主体というのは、教材を誰が決め、教材の進度を誰が決めていくかという意味です。70年代までは、学習の主体は本人にありました。すなわち、学習者は自分で書店に行って参考書や問題集を選んで買って来て、家で自分で計画を立てて学習していました。

当時の中学生に非常に役立っていたのは学習雑誌です。学習雑誌には、主として学校の先生が執筆した学習方略が沢山載っていました。学習者はそういう記事を参考にしながら、自分の学習のやり方を色々と考えて工夫していました。テストの準備はどうしたかという、教科書を読み直して、要点整理をして、それから暗記材料を自分で作って覚える、大体の人がそういう形だったのではないのでしょうか。

比較的成績のよかった人は、結局どこまでやったかという、暗記した後で、内容を確認するために問題集を解いて自分の弱点を見つけて補っていく、そういうような形で学習が進んでいただろうと思います。要点は誰でも正しく簡単に見つけ出せるとは限りませんから、要点の見つけ方が悪かった人は、当然成績が悪くなりました。ですから、授業をどう受ければ要点がつかめるかということ、試行錯誤で習得するところから始めねばなりません。これは一見遠回りのように見えますが、要点がうまくつかめるようになれば、そこで全体の体系や意味がわかるような喜びも味わえて、それが次の学習のきっかけになるという効果が大きかったと思います。

それから、学校の授業の価値についてですが、当時は学習意欲が旺盛で授業に熱心に参加すれば、理解が進みますので、良い成績を取ることができました。逆に、意欲が低くて授業にあまり参加していない場合には、要点もわからないし結果的に練習もあまりしませんから、成績も悪くなりがちでした。学習不十分で成績が芳しくなかった場合でも、やがて受験の時期が近づきますと、受験勉強をきっかけにして学習内容の理解が進み、中にはそれで学習が好きになる人もいます。そういう状況であったと思います。

(2) 90年代以降の中学生

ところが、90年代になりますと、もう全く様変わりしておりまして、もはや学習の主体は本人にありません。まず、地域にもよりますが、ほとんどの中学生が学習塾に通っています。塾の多くは教材を与えて進度も決めて、やり方も指示して、生徒にやらせます。これでは自分の工夫の余地がありません。家庭教師についている場合でも、ほとんどの場合、家庭教師が教材を決めるという形になってしまいます。これまた工夫の余地がありません。

では、塾にも行かず、家庭教師にもついていない人は問題がないのかといいますと、ほとんどの生徒が宅配教材を利用しています。宅配教材はトレーニング教材系と通信添削系の教材がありますが、これらはもう至れり尽くせりに作られており、本人の工夫の余地など全くありません。つまり、指示に従って作業として空所をうめていくと、自動的に学習が進行するようになっていくわけです。

例えば、最近のトレーニング教材というのは、御覧になった方はおわかりになると思いますが、単語の練習をするにしても、練習のスペースが作ってあって、ここに何回書きなさいというような形になっています。これら宅配教材は、見かけは似ているものの、弱点を発見するための問題集とは本質的に異なっているわけです。

これらの教育産業の問題点は、生徒の自立性を疎外するというだけでなく、学習の質をも低下させます。つまり、宅配教材も、家庭教師も、学習塾の多くも、定期試験対策として学習内容の絞り込みを行うのです。その結果「試験に出ること以外は学習しない」という手抜き態度が、醸成されてしまいます。これが、90年代以降の、家庭学習の実態なのです。

子供から学習の自立性を奪っているのは、実は教育産業だけではありません。学校の先生が自立性を奪っている例が、大学生によって多数報告されています。授業中に試験の出題内容を教えたり、暗記材料を提供したりして、学習内容を限定してしまう例が結構あるようです。生徒はそれだけを作業として実行するのだそうです。従ってほぼ全員の生徒が、定期試験の出題内容を、何らかの形で事前に知っているのです。最近では教科書準拠の定期試験対策用 CD-ROM があって、試験範囲のページ数を入力すると、予想問題が6~7通り配点までついて出てくるという仕組みになっています。定期試験用の暗記材料もいくらかでも売られています。これでは「出題箇所しか学習しない」のも

自然な成り行きといえるでしょう。

この結果、学校の授業の参加度と成績が無関係になって、授業の価値が低まってきています。つまり、宅配教材ないしは塾が提供する教材があまりにも親切すぎるために、結局それを順にこなしていけば、授業に出ていなくても簡単にいい成績がとれてしまうからです。すべての教師というわけではありませんが、出題で手抜きをしたい教師は、試験問題の作成が大変手間のかかることから、業者の提供する CD-ROM をそのまま利用して簡単に試験問題を作ってしまう。実は教師用の教科書準拠の問題作成用 CD-ROM は、生徒用に売られている予想問題 CD-ROM と元が同じですから、やった生徒は良い成績が確実に取れるわけです。これでは授業の価値が低くなって当然でしょう。授業に参加するしないということはどうでもいいことで、家でなまけて遊んでいてもその教材だけ作業としてやっていればいくらでもいい成績になるからです。以上が、家庭学習の質的低下の現状です。

(3) その間に何が起こったのか

このような変化が起こったのはなぜでしょうか。1980年代に子供たちの教育環境が、どのように変化したかを見ることに致しましょう。80年代に、宅配教材が非常に普及したことを真っ先に挙げるべきでしょう。そして、その教材会社のかなりの部分が学習塾を設立して、確実な顧客確保をねらったのです。子供がやらないような教材を売りつけるだけという批判をかわして、企業としての存続をねらったわけです。70年代までの塾は、定年退職した教員などが、独自の教育理念のもとにこつこつとやっているのが主流であったのが、80年代になりますと、企業家のマーケティング戦略に

基づいた塾が業界に参入して繁栄し、結局、教育の論理にもとづいた塾を圧迫するようになりました。これによって、教育の論理に基づく塾より、企業の論理にもとづいた塾のほうが多くなってしまふわけです。それから、ワープロが登場しその後パソコンが普及して、簡単に教材作成や問題転用ができるようになったということも、もう一方ではあるわけです。

3. 学習のあるべき姿

「出題箇所以外は学習しない」態度を「手抜き」と決めつけて話を進めてきましたが、その根拠を認知心理学の立場から述べておきたいと思います。認知心理学の研究成果に基づいて、望ましい学習の姿が何かということを考えますと、多分図2のようになると思います。図の中で「提示学習要素」と書いてあるのは、教科書に登場する学習項目であるとしす。学習が成立するためには、通常は発展学習と定着の学習と深化の学習という、3つの学習行動をとることが望ましいと考えられます。

深化というのは、用語の意味を理解する、概念どうしの構造を把握する、既に学んだ内容との関連を知るといったことが含まれます。定着というのは、言語的知識を記憶したり、知的技能を訓練して身につけようとするを言います。それから発展というのは、今度は日常生活や社会問題との関連をつけたり、他の分野との関連づけをしたり、自分で興味を持ったことについては、自分で調べてみたりすることです。

このような習得のための行動をとるとどうなるかを、「獲得学習要素」のところでお覧下さい。教科書に出

■ 認知心理学から考える望ましい学習の姿

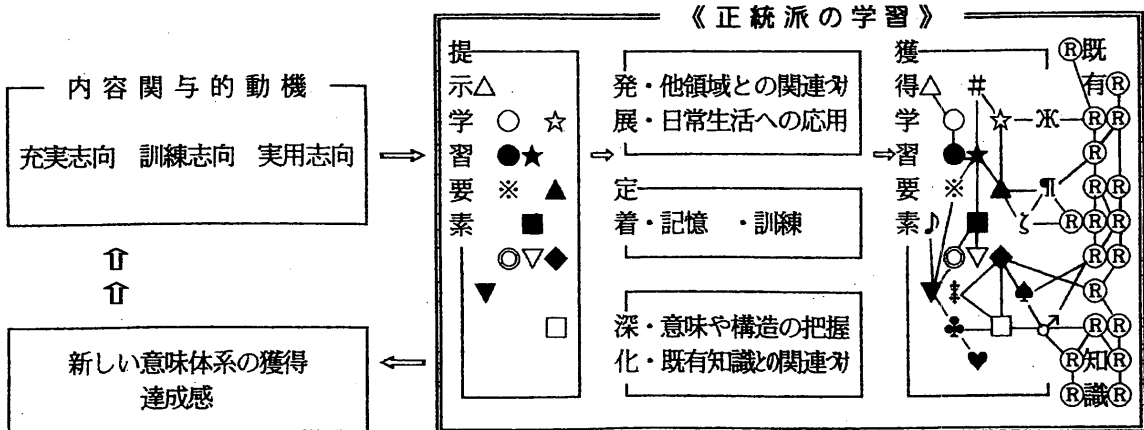


図2

てきたバラバラだった学習項目が、今度はネットワークを形成しているのがお分かりだと思います。意味がわかってお互いの関連付けがつくと、頭の中にネットワークができ、活用できる知識として、長期間記憶に残ります。既有知識とのつながりもついて、頭のなかにネットワークができると、ここで新しい意味が移植できたこととなります。この状態が、新しい学習内容が身についた状態です。

獲得された新しい意味体系はすぐに活用できますし、それによってももの認識が深まり、達成感が得られて、面白いからということで、学ぶ喜びに支えられて、次の学習をするようになります。このような内容関与的動機によって、その次の学習がまた展開するのが好ましい循環であると考えられます。このように展開する学習を、私は「正統派の学習」と呼んでいます。

4. 最近の「ごまかし勉強」

この立場から見ると、最近の子供たちの学習はどうなっているのでしょうか。図2と比較しながら、図3を御覧下さい。ここには、90年代以降の子供たちの学習の状態が示されています。「提示学習要素」は、教科書に登場する学習項目ですから図1と同じです。しかしながら、定期試験に出やすい項目（黒色部分）だけ残して、出題率の低い項目（白色部分）がなくなっていることがわかります。

このように、出題の可能性が低いところは初めから切り捨ててしまうのです。そして、発展学習も深化学習もせず、ただ、記憶と訓練という定着作業だけを行います。近々自分が受けなければいけない定期試験の準備のために、必要なことだけとりあえず丸暗記しようということ。その結果、獲得学習要素はどうなるかということ、意味も分かっていないし、お互いの

連関もついていませんし、既有知識とのつながりも当然ついていませんから、試験が終われば学習内容は消えてしまいます。つまり、定期試験をごまかすための、一時しのぎの学習のやり方なのです。私はこれを「ごまかし勉強」と呼んでいます。こういう「ごまかし勉強」をする子供たちが、最近増加しているのです。

こんな「ごまかし勉強」は面白くも何ともありませんから、耐えられる人は、また労役として勉強を続けますが、耐えられない人は逃げ出すこととなります。授業をまじめに受けない、宿題をやらない、家で学習しないなどという行動です。不登校という手段もあります。これを見た教師が、意義のわかるような授業展開をすれば別ですが、そこで誤った道を選んでしまう教師も、少なくありません。自分自身の昔の学習上の苦労を思い出して、「大変だったのは要点がわからなかったからだ」あるいは「暗記材料を作るのに時間がかかったから苦労したんだ」と考え、「その苦労した大変な部分を取り除いてあげれば、多少はやってくれるかもしれない」と判断して、出題箇所を教えたり、あるいは暗記材料を提供したりして、手間を省けるようにしてあげてしまうのです。「最低限ここだけは暗記してちょうだい」という形の指導をどうしてもしてしまう。

そういうやり方でも、生徒はそこそこの点数が取れてしまいますので、ますます「切り捨て当然」の学習姿勢が形成されることになるのです。かくして、労役としての「ごまかし勉強」が繰り返されます。つまりなければ、最低限の努力で結果だけ出そうとしますので、またごまかし勉強に陥る、そんなふうな悪循環が起きているのが子供たちの現状です。

「ごまかし勉強」であっても、それがきっかけになって良い成績がとれれば、やる気も出てきて、良い方向に向くのではないかという質問をよく受けますが、

■子供たちの学習の現状（悪循環）

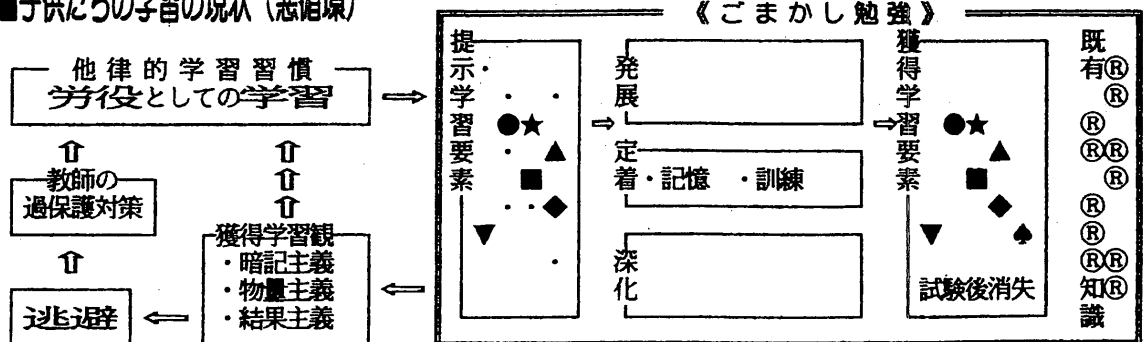


図3

実際はそんなにうまくは行きません。「ごまかし」で良い成績を取った人は、それが正しい方法だと信じていますから、「ごまかし」を続けるだけです。そして努力に努力を重ねても知識は蓄積されず、後になって後悔するだけです。大学生になって中学高校時代の自分の学習を振り返り、ほとんど何も蓄積されていないことに愕然としている人が沢山います。

そのことに気づいた大学生はまだ良い方で、学習を無意味な労役と勘違いしたままで、こういう人達が教師になると、次世代の子供たちにはまた「ごまかし勉強」をさせるでしょうから、「ごまかし勉強」の拡大再生産が起きます。これは何としてでも、食い止めねばなりません。「正統派の学習」の何であるかがわかっていない判断力のある人が、時間のない時に「ごまかし勉強」をしても実害はないと思いますが、自立的な学習者を育てるべき大切な中学高校生の時期に、「ごまかし勉強」をさせるのは、百害あって一利無しだと思われる。

5. 学校のテストの実態

ここまでで、宅配教材や定期試験準備教材などが、子供たちの学習にかなり悪影響を及ぼしているという状況が御理解いただけたかと思います。では、なぜそのような教材がはびこるのでしょうか。それを考える

ために、日本の学校におけるテストの実状を把握しておきたいと思います。

表1は、グリーンが行ったテストの分類に基づいて、私がテストを分類したものです。この表によって、いかに多様な教育評価が可能なのかということ、まず見ていただきたいと思います。「論文体テスト」というのは、学習者の独創性が要求されるようないわゆる主観テストで、日本では大学などでよく行われています。「客観テスト」は御存知のように正解がひとつだけ決まっているものです。問題集などに載っている記号選択式の問題などはこれに分類されます。「問題場面テスト」というのは、もともとは新しい場面を学習者に提示してそこで問題解決をさせるという、そういう問題ですが、教科書で学習済みの場面を提示すると客観テストになりますし、全く新しい場面を提示すれば、学習者の独創的問題解決力まで評価できます。それから「持ち込みのテスト」では、丸暗記では解決できない応用力が試せますし、「課題論文のテスト」で、時間をたっぷりかけて学習者の探究力を見たり、「課題論文プラス研究発表」というような形であれば、発表力まで調べることができます。このように教育の場面では、実は色々なテストが可能性としてあるはずですが、

日本の大学のテストでは、これらすべての中から色々な形態が選ばれていると思いますけれども、現在の日本の中学校や高等学校の定期試験では、ほとんど

表1

■日本の学校におけるテストの実情

分類*	下位分類		
ESSAY EXAMS (論文体テスト)			
OBJECTIVE EXAMS (客観テスト)	短答式テスト (記述式)		現在の中学校の定期考査の問題は、ほぼこの範囲に限定されている。従って、出題内容も限定される。ここに、企業論理の入り込む余地がある。 ↓ 「ごまかし勉強」の発生。
	正誤法、多肢選択法 組み合わせ法等の再認検査		
PROBLEM EXAMS (問題場面テスト)	既習場面テスト	読解解釈型	
		演算型	
	新設場面テスト		受験業界では「新学力観問題」
OPEN-BOOK EXAMS (持ち込み可テスト)			
TAKE-HOME EXAMS (課題論文テスト)			
ORAL EXAMS AND REPORTS (研究発表)			

*G. W. Green (1999) の分類による。下位分類は、今回のテーマに合わせた藤沢の分類。

のテストが、客観テストと(既習の)問題場面テストに限定されてしまっています。長文読解や実験場面が提示されている問題があっても、既に学習済みの内容から出題していますから、結局すべて客観テストになります。実はここに問題があるのです。教科書完全準拠の客観テストなら、狭い範囲の出題事項は限定され、いくらでも問題の予想が可能になりますから、ここに企業の論理が入りこむ余地があって、的中予想問題を商品にできるわけです。

アメリカやカナダのハイスクールでは多様なテストが行われていますから、日本の中学や高校でも、多様なテストは不可能ということはないはずです。日本の中学や高校でも、論文体テストや、課題研究発表による評価というようなことがもっと一般化すると、予想問題の大量生産が不可能になり、企業の論理が入り込む余地がなくなりますので、宅配教材が子どもたちの学習に悪影響を及ぼすということは防げるかもしれませんが、とにかく試験問題が限定されてしまっているところに問題があるように思われます。

6. 「ごまかし勉強」の原因

実は、こういう論説を行うことができたのは、大学生たちの協力がかなりあったからです。大学生を対象に、中学時代、高校時代にどういったごまかし勉強をしてきたかについてずいぶん色々な調査をいたしました。私は最初はそんなに学校に原因があるというふうに全く思っていなかったのですが、何でごまかし勉強をするようになったか学生を対象に調べますと、

■「ごまかし」姿勢への方向づけ要因

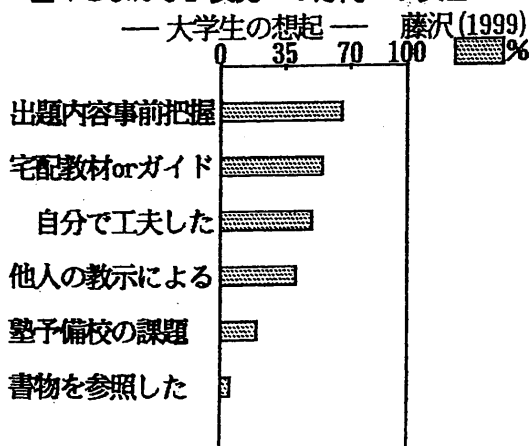


図 4

最大の原因は、試験問題の中身が事前にわかっているから、どうしてもごまかしをしてしまうということでした(図4)。他の原因として、宅配教材や教科書ガイドがごまかしを誘発しているということなどが、挙げられました。他方、塾や予備校の課題がごまかしを誘発したということは、意外に少ない形になっています。

また、ごまかしの発生状況について、最初ごまかし勉強をしていたのに、これではだめだと正統派に切り替えた例もあります。これはなぜ切り替えたかという、受験目的のようです。結局ごまかし勉強で乗り切れるのは範囲の狭い定期試験だけで、受験のことを考えると、記憶すべき内容がものすごく多いので、むしろ意味学習をしたほうがよほど効果があるわけです。ですから、受験目的で正統派に切り替えたという回答でした。

これまでの教育の論議では、教育の問題の原因はすべて受験の弊害ということで片付けられてしまうくらいがありましたけれども、「ごまかし勉強」という教育問題に関しては、受験制度はマイナスに働くというよりはプラスに働いているということが、見てとれるわけです。実際、受験競争が緩和された現在、ごまかし勉強が増えているのです。

7. 「ごまかし勉強」の特徴

このあたりで、「ごまかし勉強」の特徴をまとめておきたいと思います。表2で「ごまかし勉強」と「正統派の学習」を比較しますと、まず「ごまかし勉強」では学習範囲を試験に出やすいところだけに限定します。「正統派の学習」では、自分の興味、関心、必要に応じて学習範囲を広げていきますから、方向がまったく逆になると思います。それから、「ごまかし勉強」の欄の「代用主義」というのは、暗記材料を出版社の作った暗記カードで代用するとか、先生の配ってくれたプリントの要点をもって自分の要点整理に代用するとい

表 2

■ごまかし勉強と正統派の学習の比較

ごまかし勉強	正統派の学習
学習範囲の限定(高出題率部分) 代用主義 機械的暗記志向 単純反復志向(物量主義) 結果主義	学習範囲の拡大 独創志向 意味理解志向 方略志向 思考過程の重視

うことです。これに対して「正統派の学習」の欄には、独創志向と書いてありますが、自分でノートに要点をまとめたり、自分なりの暗記カードを作ったりすることを意味しています。

記憶に関しては、機械的に丸暗記しようとするのが「ごまかし勉強」の特徴であるのに対し、意味をきちんと理解した上で記憶するのが「正統派の学習」ということになります。また、「ごまかし勉強」では、ただ練習量をこなせばよいと考えてしまうのに対し、「正統派の学習」では学習方略を色々考えて工夫するというのが特徴です。それから「結果主義」がごまかし勉強の特徴であるのに対して、思考過程を重視するのが正統派の学習であるということです。

8. 「ごまかし勉強」増加を裏づける学習参考書の変化

さて、ここまでで「ごまかし勉強」が増えてきたというお話をして参りましたが、それを裏づけるようなデータとして、次に、学習参考書の変化をあげてみたいと思います。これは「ごまかし勉強」が本当に増えているということの、ひとつの証拠になるだろうと思います。

図5は、旺文社の図書目録を使って、どんな種類の学習参考書を製作販売しているかを、1984年と1999年

年の15年間で比べたものです。全体に占める受験用学習参考書の比率はあまり変わっていませんが、平常学習用についてはその中の構成比率が大きく変化しています。つまり、解説参考書とか分野別学習書のように、自分で中身を納得して習得していくというタイプのものは種類がぐんと減りまして、昔はなかった定期考査対策用という新しいタイプの学習参考書というのが、後のほうで登場しているのです。

この新たに登場した定期考査対策用学習参考書は、解説参考書と問題集を組み合わせたような教材ですが、従来の学参にない5つの特徴を持っています。まず、章立てが細かく、だいたい本の中が30章から32章ぐらいに分けられております。これが何を意味するかということ、年間の授業週と対応していて、1章がだいたい1週間分になっているのです。それから昔の学習参考書は、目次を見るとその分野の体系がわかるようになっていましたが、新タイプの学習参考書は目次をみても、体系がよくわかりません。詳しい解説よりは、必要最低限の学習項目の説明があるだけです。その本だけを使えば済むように、暗記材料自体も提供しています。

それから問題部分は解答が書き込み式になっています。昔の問題集には「本書の使い方」のページに、解答は書き込まないで繰り返しやりましょうと書いてあったのですが、最近はどうぞ書き込んでくださいと

■分類別発行種類数のグラフ

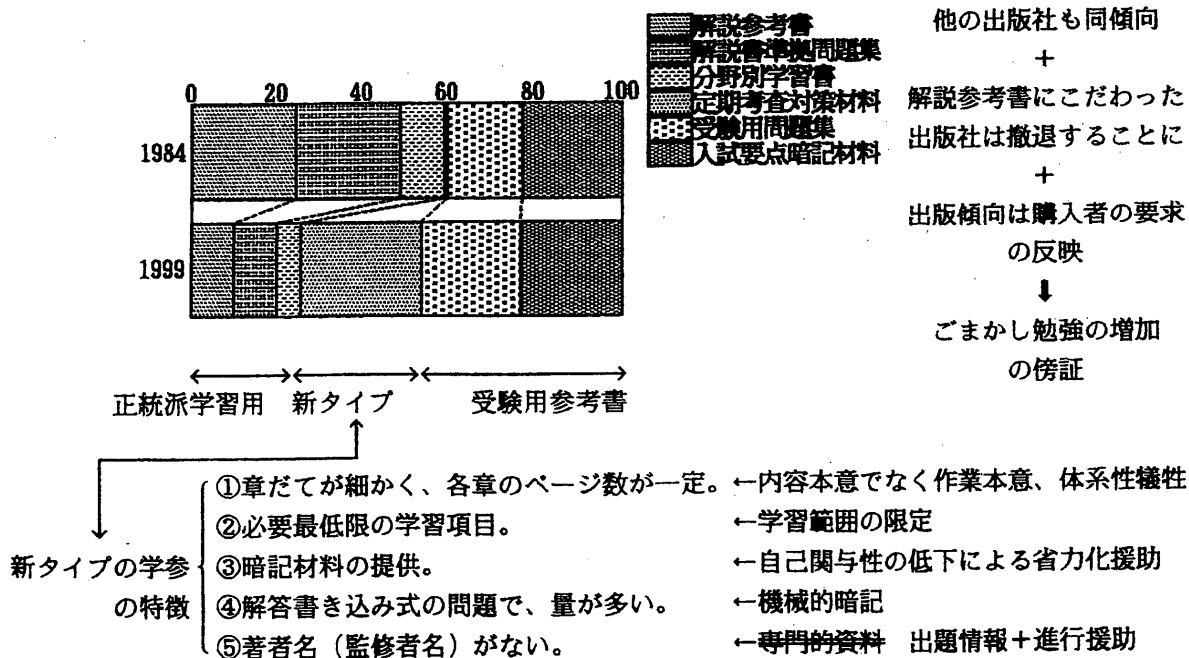


図5

のように欄がたっぶり取ってあるのです。これは、ごまかし勉強がしやすいように作られていると考えられます。「ごまかし勉強」の典型的なやり方は、問題は自分で解かずに初めから正解答を赤で記入してしまい、それを暗記するからです。

後は、新タイプでは著者名がありません。昔の解説参考書は資料としての意味を持っていましたから、大学教授の名前が載っていましたが、今は専門的資料という位置づけではなくて、単に普通の勉強の進行を援助するだけになっていますので、そのような特徴があるわけです。

このような学習参考書の変化は、子供たちの学習スタイルの変化の反映だと考えられます。商品は利用者の実態にあっていないと売れないからです。試験に出やすいところに学習を限定し、自分で要点をまとめたりせずに出合いの暗記材料で代用し、意味を考えずに解答を丸暗記して、試験が終われば忘れる、という子供たちの学習行動に、この新しいタイプの学習参考書は実にピッタリです。

9. 「ごまかし勉強生成システム」

さて、この「ごまかし勉強」の傾向は、今後どのようになっていくのでしょうか。私の考えは極めて悲観的です。なぜなら、「ごまかし勉強生成システム」のような、非常に強固で安定したシステムが現代の日本社会の中に巣くっていて、それががん細胞のようにどんどん増殖しているからです。

図6がこのシステムの全貌です。親は子供に好成績を期待しています。子供は、つまらない作業からは逃げようとしています、楽をして好成績を納めたいと

も思っています。そこに目をつけた教材会社は予想問題を商品化し、自社製品を採用すれば学校教師も楽し子供も好成績で喜ぶという体勢を作りあげます。学習塾や家庭教師も、その商品を使って利益拡大を図ります。これで、一見誰にも不都合のないシステムができ上がるのです。一番の被害者は学習者である子供たちですが、当人たちは全く気づいていません。

10. 学力低下を食い止める処方箋

「ごまかし勉強」は決して好ましい傾向ではないので、これを何とか壊さなければいけません。しかし、これはなかなかの難題です。関与している教材会社や学習塾は、もともと企業として存在している利潤追求のための組織で、利益追求は当たり前のことで、別に悪いことでもなく、企業が企業の論理に従うことは非難も何もできないわけです。そういう意味で考えたとき、このシステムをぶち壊して、本当の身につく学習をさせられるのはいったい誰かといたら、たぶん教師しかいないだろうと思います。教師は教育の論理に従って行動することが社会的に期待され、しかも認められている存在ですから、利益にはならないけれども子供たちのためになるように、一肌脱いでいただかなければならないと思っています。

教師に何ができるかを考えるための材料を、最後に提供したいと思います。表3を御覧下さい。これは、教師のどのような教授行動が「ごまかし勉強」を誘発するかについて、大学生に尋ねた結果です。

「定期試験に、教科書そのままを出題したからではないだろうか」とか、「事前に試験問題を一部教えてくれた」とか「全部教えてくれた」とかそういうことで、

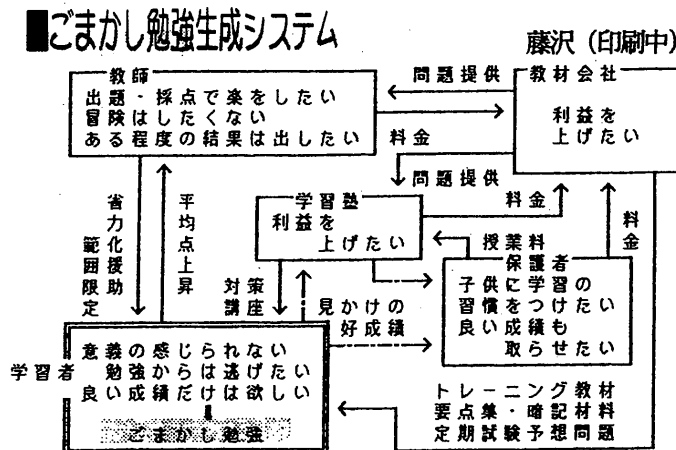


図6

表3

■教師のどのような授業行動が「ごまかし」を誘発するか。(学習者の側の判断)

藤沢(2000)

分類	教授行動(%)	中学時代(118名)						高校時代(172名)					
		英語	数学	国語	理科	社会	平均	英語	数学	国語	理科	社会	平均
範囲限定支援	使用教材同一出題	68.7	56.2	33.3	78.2	75.0	62.3	84.6	90.3	70.0	75.0	68.5	77.7
	試験問題一部教示	40.6	43.7	40.0	56.5	53.1	46.8	67.3	58.0	60.0	62.5	44.4	58.4
	出題全項目教示	25.0	31.2	20.0	21.7	9.3	21.4	42.3	58.0	40.0	50.0	33.3	44.7
	試験志向学習主張	9.3	12.5	0.0	4.3	21.8	9.6	15.3	25.8	5.0	31.2	7.4	16.9
	発展学習の抑制	6.2	25.0	0.0	4.3	18.7	10.8	17.3	6.4	10.0	18.7	11.1	12.7
	試験問題全問教示	15.6	6.2	6.6	8.6	6.2	8.6	17.3	12.9	10.0	6.2	5.5	10.4
省力化を援助	ワークブックが暗記材料	40.6	12.5	40.0	39.1	40.6	34.6	42.3	45.1	50.0	50.0	20.3	41.5
	教師作成暗記材料	34.3	12.5	13.3	21.7	28.1	22.0	25.0	35.4	35.0	18.7	42.5	31.3
	チェック用遮蔽板推薦	9.3	6.2	0.0	13.0	9.3	7.6	5.7	12.9	15.0	6.2	5.5	9.1
丸暗記の奨励	考察抑制暗記奨励	25.0	31.2	13.3	13.0	31.2	22.7	25.0	25.8	45.0	50.2	46.2	38.4
	解答表現指定	12.5	0.0	6.6	17.3	12.5	9.8	9.6	3.2	30.0	6.2	14.8	12.8
	その他	0.0	0.0	0.0	4.3	0.0	0.9	11.5	9.6	20.0	12.5	1.8	11.1
合計人数(総計 291名)		32	16	15	23	32		52	31	20	16	54	

学習範囲を限定するのを助けるような行動があったと、生徒の側は見ています。それから、「学校で暗記材料が配られていた」とか、「とにかく難しければ理解しないで構わないから暗記で乗り切るように、というようなことを先生が勧めていた」、そんなことを言っている場合もありました。

これはあくまでも学習者の側の判断で、この授業をした側の先生の言い分というのは全くここに入っていないわけですから、客観的な妥当性があるかどうかはわかりませんが、少なくとも学習者の側が先生方の努力にもかかわらず、ああいう教え方をしているから自分が「ごまかし勉強」をするんだというふうに思ってしまうという、そういうことだけはわかるわけで、教授法を改善するためのヒントにはなると思われれます。

また、先程指摘しましたように、学校の定期試験が客観テストに偏り過ぎているために、企業の介入を許してしまっています。これまでは相対評価が中心になっていましたから、ある意味でやむを得なかった部分もありますが、これからは絶対評価が導入されることでもありますので、この辺りで、テスト問題をもっと工夫して、多様な問題作りを試みていく必要があるのではないのでしょうか。

しかしながら、現実問題として、個々の良心的な先生方が何かしようと思っても、同僚の批判的な目があったり、保護者の教師に対する信頼感が欠如していたりすると、せっかくの勇気が萎えてしまいます。それ

ぞれの教師が、今よりももっと信頼され、自分の勇気をふるって、子供たちに一番プラスになることがしていけるような、そういう社会でなければいけないだろうと思っている次第です。

本論文は、2001年度第1回プロジェクト研究会(2001年6月3日)に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第4号』(2002年3月31日発行、Pp 3-11)に掲載されたものである。